

1. 管内黒毛和種繁殖農家における牛伝染性リンパ腫 清浄化への取組事例

豊後大野家畜保健衛生所
○原彰宏・(病鑑) 菅正和
児玉千尋・(病鑑) 佐藤亘

【はじめに】

当家保管内では、過去9年の間に黒毛和種繁殖農家20戸に対し、重点的に牛伝染性リンパ腫清浄化対策を指導してきた。今回、規模拡大と清浄化対策に平行して取り組み、一定の成果が得られた事例について概要を報告する。

【農場の概要】

当該農場は黒毛和種繁殖農家で、平成28年度には飼養する70頭中66頭(94.3%)が牛伝染性リンパ腫ウイルス(BLV)抗体を保有し、以下の清浄化対策を開始した。

【清浄化対策の内容】

1 平成28年から令和3年度までの清浄化対策

飼養する全頭のBLV抗体検査を行い、BLV抗体陽性牛(陽性牛)、BLV抗体陰性牛(陰性牛)を分離飼育した。陽性牛を優先的に淘汰し、抗体検査陰性の導入牛と保留牛へ更新した。垂直感染防止のため、早期母子分離を実施した。

2 令和3年度から令和6年度までの清浄化対策(強化対策)

淘汰・更新を加速化するために以下の対策を実施した。

- (1) 受精卵移植技術を利用し、高能力な陽性牛産子の後継牛生産を開始。
- (2) 経営体の中に肥育経営を追加、陽性牛の経産肥育の開始。
- (3) 淘汰順位作成のため、陽性牛全頭のBLVプロウイルス量(PVL)を測定。

また、令和5年度に飼養頭数の増頭に伴い牛舎を増築し、導入牛と保留牛を抗体検査とBLV遺伝子検査結果が判明するまで隔離することが可能となった。

【清浄化対策の経過】

平成28年からの対策開始後、令和元年までに陽性牛の淘汰・更新で、陽性率が94.3%(66/70頭)から50.8%(61/120頭)まで減少した。平成30年から令和3年の間に規模拡大対策を開始し、飼養頭数が88頭から134頭へ増加したが、完全な分離飼育が困難となり、陽性率58.2%(78/134頭)まで増加した。その後、強化対策として受精卵生産や肥育経営の追加やPVLによる淘汰順位作成などを作成し、経営への影響を考慮し、陽性牛の淘汰更新を進めた。増築した牛舎で導入牛および保留牛を隔離飼育可能となり、抗体陽性に転じる個体が減少した。令和3年から強化対策後、令和6年までに陽性率は、58.2%(78/134頭)から36.1%(52/144頭)と推移した。

【まとめ】

BLV清浄化対策には、陽性牛と陰性牛の分離飼養と、陽性牛の淘汰・更新が対策の中心となる。本農場は、規模拡大と清浄化対策の両方で一定の成果を得られた。BLV清浄化対策を行う他農場においても、経営状況や飼養管理の方法に応じた指導を行い、効率的な清浄化対策を実施していきたい。